

「自分らしさ」を発揮することで「アイドルらしさ」から 抜け出した『No No Girls』 ——自己啓発的な側面に着目して

井野 薫 (村上ゼミ)
HS22-1078J

論文の目次

第 1 章 はじめに

- 1.1 研究の背景と目的
- 1.2 本論文の構成

第 2 章 「アイドルらしさ」というステレオタイプ

- 2.1 操り人形としてのアイドル
- 2.2 非熟練者としてのアイドル
- 2.3 異性愛の対象としてのアイドル
- 2.4 楽曲の主人公とアイドル当人のパーソナリティの関係

第 3 章 女性向け自己啓発メディア

- 3.1 女性向け自己啓発書
 - 3.1.1 『an・an』における自己の体制
 - 3.1.2 女性向け「年代本」に見られる特徴
- 3.2 「自己啓発メディア」として作用するアイドル楽曲

第 4 章 『No No Girls』の分析

- 4.1 分析の対象と方法
- 4.2 プロデューサーの方針
 - 4.2.1 オーディションの審査基準
 - 4.2.2 振る舞いや表現に関する指導内容
 - 4.2.3 落選した候補者に向けた言葉
- 4.3 候補者の発言
 - 4.3.1 ”救われる側” から ”救う側” になったファイナリストたち
 - 4.3.2 落選した候補者のその後
- 4.4 楽曲の歌詞と込められた意図
 - 4.4.1 候補者による作詞
 - 4.4.2 最終審査ソロパフォーマンスの楽曲選定に込められた意図

第 5 章 考察

- 5.1 『No No Girls』はどのようにして「自己啓発メディア」として作用するのか
- 5.2 『No No Girls』で提示された「自己の体制」
- 5.3 『No No Girls』は「アイドルらしさ」から脱却しているのか

第 6 章 おわりに

- 6.1 結論
- 6.2 課題と展望

1 背景と目的

今日の社会に強固に息づいている女性アイドルの「アイドルらしさ」には、「異性愛主義的な表現に収斂している」「操り人形である」などといった、ネガティブなイメージが託されることが少なくない。そしてそれは、社会の多数派の価値観を少なからず反映したものである。

これまでのアイドル論では、「アイドルらしさ」を批判的に捉える言及や、抵抗する姿勢を見せた事例は示されていたが、明確に脱却できていると言えるような事例は示されていなかった。

そこで、本論文では、ガールズグループオーディション番組『No No Girls』を分析する。同オーディションは、身長、体重、年齢などを一切求めない。そのため、「アイドルらしさ」を打ち崩すことが期待できる。本論文は、『No No Girls』を、「アイドルらしさ」を脱却できている全く新しい事例として、アイドル論に提示することを目的とする。

また、非常に大きな反響を呼んだ同オーディ

ションを、牧野智和が定義する「自己啓発メディア」として捉えることで、現在の社会で求められている女性の望ましいあり方のひとつを導き出すことができる（牧野 2012）。

2 分析方法

本論文では、動画配信サービス Hulu で配信されている『No No Girls』完全版全 16 話を対象に、番組内の発言や字幕の文字起こしを行い、そのデータをもとに内容分析をしていく。

3 分析で得られた結果

オーディションの審査結果から、プロデューサーであるちゃんみなは候補者に対して、歌やダンスのスキルや、なりたい姿を見据えるということを主に求めていたことがわかった。そして、「自分らしさ」を発揮するということが重要視した方針で指導が行われていた。

このような方針のもとで成長した候補者たちは、“救われる側”だった者たちが最終審査時点には“救う側”になったという評価を受けており、番組内での発言や、作詞の内容においてもその変化は顕著に表れていた。

また、ちゃんみなは落選者に対しても、継続的にサポートをしていく姿勢を見せている。最終審査のステージでは落選者に対してもパフォーマンスの機会が与えられ、落選時から最終審査までの間に彼女らに起きた変化も、番組内の発言から読み取ることができた。

4 考察

分析で得られた結果を青田麻未の先行研究と照らし合わせることで、『No No Girls』は「自己啓発メディア」としての機能を備えているということが確認できた。青田は 2 つの段階を経ることでその機能を果たすとしていたが（青田 2022）、『No No Girls』では更にもう 1 つの段階を見出すことができた。それは、「プロデューサーの言葉によってアイドルのパーソナリティが強化される段階」である。ちゃんみなが示す姿

勢と従来のプロデューサーの姿勢の違いこそが、従来のアイドルとの違いを生んだ最大の要因なのだ。彼女は、「アイドルらしさ」ではなく、「自分らしさ」を表現することを要求していた。

このことから、「何者にも囚われずに、『自分らしさ』や、その先の『なりたい姿』を追求し、発揮していくこと」が望ましいあり方として提示されていることがわかる。番組内では、落選者も含めた候補者 30 人全員がこのあり方を体現しようと努力する様子がみられた。

また、『No No Girls』は「アイドルらしさ」から完全に抜け出すことができているという結論に至った。先行研究で提示されていたステレオタイプとしての「アイドルらしさ」の各項目について、このオーディションでは当てはまる点が全くない。

そして、楽曲の主人公ではなくアイドル自身の言葉で「痛み」が歌われることで、「自己啓発メディア」として鑑賞者により強く作用するということが、大きな特徴の 1 つである。

主要参考文献

- 青田麻未, 2022, 「アイドル楽曲の鑑賞と日常美学——自己啓発という観点から」田島悠来編, 2022, 『アイドル・スタディーズ——研究のための視点、問い、方法』明石書店, 91-103
- いなだ易, 2022, 「『ハロプロが女の人生を救う』なんてことがある？」香月孝史, 上岡磨奈, 中村香住編, 2022, 『アイドルについて葛藤しながら考えてみた——ジェンダー/パーソナリティ/（推し）』青弓社, 72-100
- 太田省一, 2011, 『アイドル進化論——南沙織から初音ミク、AKB48 まで』筑摩書房.
- 香月孝史, 2020, 『乃木坂 46 のドラマトゥルギー——演じる身体/フィクション/静かな成熟』青弓社.
- 牧野智和, 2012, 『自己啓発の時代——「自己」の文化社会学的探求』勁草書房.
- 2015, 『日常に侵入する自己啓発——生き方・手帳術・片づけ』勁草書房.